

■フォトエッセイ■

# 南スーダンの 原風景を訪ねて



ボートの縁で川を見つめる少年。「どこを見ているのか」と視線を追うと、広大なサッドの風景が広がっていた



写真・文 中野智明  
Tomoaki Nakano

牧畜民キャンプで毎朝、必ず行われる重要な作業。  
害虫などから牛を守るために、牛糞を燃やした灰を、  
体に擦り付ける

早朝の牧畜民キャンプで起き出した子どもたちが、ナイル川の水で顔を洗っていた







牛に牛糞の灰を擦り付ける少年。  
大人だけでなく、子どもたちも  
牛を大事に扱う



密猟者が分け前の獲物を抱えて歩いていた。野  
生の動物は撃っても、牛は狙わない

南スーダンの首都ジュバ。二〇一一年七月九日の独立式典会場には誇りに満ちた喜びの瞬間に涙を浮かべた人たちが大勢いた。アフリカの新たな石油国家の誕生。あれからわずか五年弱。サルバ・キール大統領とリエック・マチャール元副大統領の間で二〇一三年二月から始まった紛争が、治安を悪化させ、経済を破綻させたまま、多くの国内避難民が行き場を失っている。昨年八月の和平交渉は合意に達したものの、戦闘が止む気配はない。独立によって急激な生活環境の変化がもたらされたが、どれだけの国民に浸透しているのだろうか。

第二次スーダン内戦が激化していた一九九一年の年末から一九九二年の正月にかけて、私はドキュメンタリー番組の撮影隊とスーダン南部の白ナイル川畔の町ボルに滞在した。戦時下でありながら、伝統的な生活を守り抜くディンカ

牧畜民を撮影するために川の東岸から西岸へ渡るボートに乗る交渉を、当時の反政府勢力（現南スーダン政府）と繰り返していた。目指していたのは、牧畜民キャンプがまだあるといわれていた地域へ繋がるシャンベという村だった。ケニア国境からボルまでの牧畜民の村はスーダン軍の空爆でことごとく焼き払われ、逃げ遅れた村人たちの遺体、牛の屍をたくさん目撃した。当時この地が独立国家になることなど、まったく予想もできないことだった。

ボルは、ナイル川最大の難所と呼ばれる「サッド」（アラビア語で障害の意）の南に位置する。パピルスによって形成される大小の小島が水の流れを阻み、川は無限に広がり巨大な湿地帯となる。マラリアなど風土病が蔓延していたサッドではかつて、多くの探検家たちが移動するパピルスの島のために方向を失って命を落とした。生い茂ったパピルスの奥に何が潜んでいるのか、と想像したくなるほど先がみえない。ナイル川はサッドで停滞している間に、水量の半分以上が蒸発しているという。

二一年ぶりにボルを再訪した。首都ジュバから約二〇〇キロの道を車で四時間以上。独立は果たしたが、地方へ向かう幹線道路で舗装されている場所は非常に少ない。白ナイル川沿いに建設中の大きなホテルがあった。屋上に上ると当時は壊滅状態だった牧畜民キャンプが対岸に見える。夕刻のキャンプでは、夜に備えて、乾燥した牛糞に火をつけていた。立ち上る煙が、夜の蚊の攻撃から家族と家畜を守ってくれるのだ。雄大なサッドの風景のなかを、ゆっくりとキャンプに戻って来る牛の群れをみていると、内戦時に訪れた記憶が



蚊よけのために牛糞を燃やした灰を、  
体中に塗って寝るため、朝起きると  
こんな顔で「おはようございます」



サッドは、パピルスをはじめ様々な水草で覆われている



放牧からキャンプに  
戻ってくる牛の群れ。  
牛の数は富を、尊敬の  
象徴でもある

四〇億ドルという国家の公金が一〇一二年、  
政府関係者によって盗まれ消えてしまった。キ  
ール大統領は返却を求める手紙を書いたが、こ  
の巨額の金の行方は、今も不明のままだ。牧  
畜民にとっては牛の数が富の象徴だが、貨幣

牧畜民たちは、蚊よけのために体に灰を塗  
って寝るため、早朝は顔や体が白っぽくなっ  
ている。一日の始まりは、殺菌、虫よけのた  
めに大事な牛に牛糞の灰を塗る作業から始ま  
る。牛が放尿するタイミングをみつけると、近  
付いて尿で顔を洗う人がいる。殺菌作用があ  
っているらしい。キャンプ内を歩いていると、  
内戦時と違う風景に気が付いた。誰もが丁シ  
ヤツ姿で、小さな子どもたちでもパンツをは  
いていた。物が入り込まなかった牧畜民キャ  
ンプに、服だけではなく、ビニールシートや  
空のペットボトルなどもあった。独立してか  
らの南スーダンでは、急速な貨幣経済の導入  
と物流がボルなどの主要な町を変えただけで  
はなく、周辺の牧畜民キャンプの生活にまで  
浸透し始めていた。四半世紀程の時間が経過  
しても、サッドのなかの牧畜民の生活はまだ  
しっかりと残っていたが、牧畜民の牛を中心  
にした生活は、確実に変化の波に巻き込まれ  
ている。

翌朝、船外機のついたボートで対岸の牧畜  
民キャンプへ渡った。まだ起き出していない  
キャンプの様子をみて周辺の川を下ってみる  
と、パピルスの小島がいくつも現れ、行き先  
を塞いだ。今でも首都ジュバと上流の町を結  
ぶ航路が遮断されることがあるという。

蘇ってきた。あの頃は、服を身に着けている  
人はほとんどいなかった。全裸の若者がAK  
47を背中にかけて闊歩していた。



夕刻の牧畜民キャンプでは、牛の糞に火がつけられ、夜を過ごす準備が始まる



サッドの中をボートで進む。水草を避けながらなので真っ直ぐ進めず、時間がかかる

夕日が沈んだ直後に、ボートを漕いだ男がナイル川の対岸から牧畜民キャンプに戻る



なかの ともあき／フォトジャーナリスト

フォトジャーナリスト。83 年からアフリカ大陸で活動を続け、ルワンダ大虐殺、南アフリカのアパルトヘイト終焉の現場などを取材。2015 年までに 47 カ国を訪れた。

経済の価値観が広がっていくなかで、富める者と国家経済の底辺にいる者との格差の自覚が始まるまで、時間はかからないのではない。原油がもたらす富の分配などあるのだろうか。巨額の公金をコントロールできない政府の存在と牧畜民のシンプルな生活。この二つの両極がひとつの国のなかで、まったく別の風景を作り出している。二〇年以上前にみた戦場は、異なる民族、違う宗教に対して自らの存在を勝ち取る戦いの場であった。しかし今、仲間同士が殺し合う。権力、石油の利権のための争いには、戦いの大義が不明だ。昨年、ジャーナリストの殺害も続いている。キール大統領は「報道の自由は国家に刃向ってもいいということではない」として、反政府的な記事を発信することは許さないと警告していた。自らの国家の姿を理解せず、石油マネーの使い道を考慮せず、富める者と、そうではない大多数の国民の差は大きくなるばかりだ。

独立四周年記念日に、独立をみることなく、謎のヘリコプター事故で死亡した南部スーダン解放闘争の父ジョン・ギヤランの妻レベッカは「解放闘争を戦ってきた南スーダンの国民に何も還元できていない現状を申し訳なく思う」という遺憾の意をイギリス国営放送のインタビューに答えて語った。

開発するには、あまりにも広大なサッドは、今も変わらず悠久の姿をみせる。しかし、この風景の奥には残念なことに、私利私欲という紛争の種が大きく広がっている。豊富な原油を有するこの国の将来が、サッドで蒸発しているナイル川の水のようにならないでほしいものだ。目に映る原風景は今も変わらない。